

## 均衡理論の適用による

### 母—子の態度に関する研究（第2報告）

（その1）事後テストにおける母—子の親近感情と  
母—子の態度の類似度との関係

（その2）子どもの行動に対する母—子の反応・態  
度の変動性・安定性

古 畑 和 孝

鈴 木 百合子

#### 序

筆者らは、頭書の表題に関する一連の研究を遂行し、さきにその第1報告を公けにした（古畑ほか、1969）。そこにおいて筆者が示そうとしたのは大要次のようなものであった。すなわち、母—子の子の典型的行動に対する態度をみるのにあたって、均衡理論の中でも、殊に Newcomb (1965, 1968) による枠組を利用し、まず、母—子にとって共通して関心のある重要と認知される対象を選出し、これらの対象に対する母—子の態度の類似度に関する4指標算を出し、それとともに、母—子の親近感情を測定する尺度を構成した。こうして作成された尺度に対する反応を基として、母—子の親近感情と、母—子の態度の類似度との間の関係を、均衡理論から導き出された仮説にしたがって検討を試み、母—子—X（子の行動に関する）間における均衡関係の成立に関する諸仮説を立証し得たのであった。

ここに公けにしようとする第2報告は、それをうけるものである。第1報告で示した関係に関する調査（事前テスト）を行なったその10日後に、筆者らは、無作為に割り当てた実験学級の子どもに対してのみ、現実ならびに理の子どもについての母親の評定結果を、一定の仕方でフィードバックを行

なったのであった。そして、そのフィードバックの操作の行なわれてからさらに12日後に、事前テストと同一形式の事後テストを、実験・統制の両学級に対して施行した。そのフィードバックの母—子の態度・行動の変容に及ぼす相対的効果に関しては、近く別に公表される筈である（古畑・鈴木，1971）。

ここには、(1)事後テストの段階においてもなお、事前テストの際に見出されたような、母—子の親近感情と、母—子の態度の類似度との間には一定の期待されるような関係が見られるかいなかの検討。ならびに、(2)子どもの行動に対する母—子の反応の、事前・事後両テスト間での安定性・変動性に関する検討の結果の概要を簡単に提示しようとするものである。<sup>\*</sup>

### （その1）事後テストにおける母—子の親近感情と母—子の態度の類似度との関係

**目的：**第1報告においては、事前テストにおける母—子間の親近感情得点の相関関係および、母—子の親近感情得点と母—子の態度の類似度との相関関係を調べた結果、認知的均衡理論から導かれた諸仮説を検証することができた。本報告の目的は、1) 事前テストの22日後に施行された事後テストにおいても、事前テストで示されたのと同様の均衡関係がXを媒介として母—子の間にみとめられるかどうか、また、2) 事前テストと事後テストの間に導入した、事前テストにおける母親の反応を子に示すというフィードバックの操作によって、事後テストにおいて、母—子の均衡関係に方向性のある変化がみられるかどうかを調べることにある。

**仮説：**そこで、事前テストにおけると同様、次の仮説をたて、事後テストにおいてもなお、事前のそれと同様の結果がみられるかいなかを検討する。仮説の導かれる基本となる枠組は、主として Newcomb (1965) の均衡理論によるが、詳しくは、第1報告（古畑・鈴木ほか，1969）を参照されたい。

---

<sup>\*</sup> なお、本論文は、（その1）は鈴木が、序および（その2）は古畑が、それぞれ執筆を分担し、最後に古畑が全体の調整を行なった。

1) 事後テストにおける均衡関係に関する仮説

〔仮説1〕 子の側からみた親近感情得点と、母の側からみた親近感情得点の間には、正の相関関係がみられるであろう。

〔仮説2〕 子の側からみた親近感情得点と、子—Iと子—IIとの比較から得られる Assumed Similarity との間には正の関相関係がみられるであろう。(これは子の認知体系内での均衡に関する。)

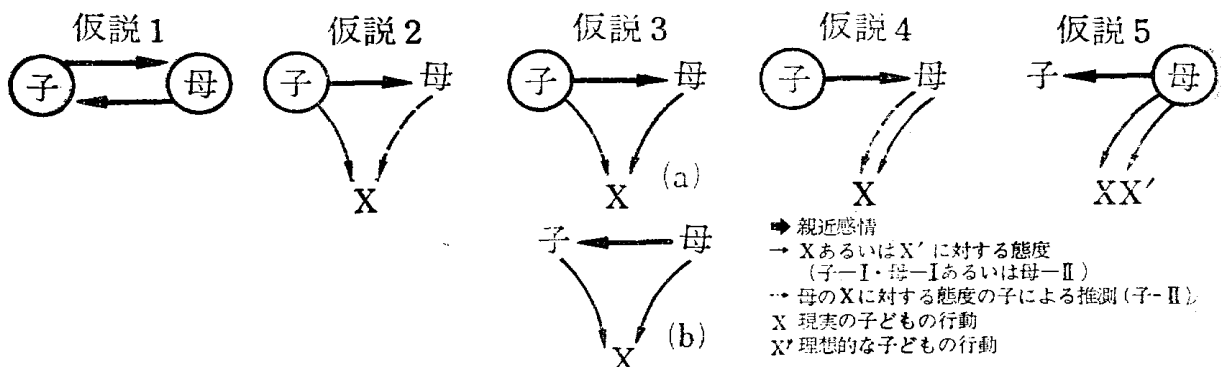
〔仮説3〕 (3—a) 子の側からみた親近感情得点と、子—Iと母—Iとの比較から得られる Real Similarity との間には正の相関関係がみられるであろう。(3—b)同様のことが母の側からみた親近感情と Real Similarity との間においてもいえるであろう。(これは母—子の対人的体系内での均衡に関する。)

〔仮説4〕 子の側からみた親近感情得点と、子—IIと母—Iとの比較から得られる Accuracy との間には、正の相関関係がみられるであろう。(これは主として子の認知体系内での均衡に関する。)

以上の仮説は、認知的均衡理論から導き出されたものである。この他に、均衡理論から直接導き出されるものではないが、母の満足度を考慮に入れるなら、次の仮説が考えられる。

〔仮説5〕 母—子の親近感情得点と、母—Iと母—IIとの比較から得られる Satisfaction との間には、正の相関関係がみられるであろう。

以上5つの仮説にとりあげた関係は、簡略化して図示すると、第1図のようになるので参照されたい。



## 2) 事後テストにおける均衡関係の変化の予測

仮説3は、母—子間に、双方にとって重要な態度の対象Xに関するコミュニケーションが日常行なわれていることを前提として成立するものである。というのは、この仮説の出発点としての対人的体系そのものが、相互に好悪の感情を抱く2人の間のXに関するコミュニケーション（言語的とは限らない）をまっぴらして成立すると考えられているからである。ところで、母親の事前テストで現実ならびに理想の子どもに対する反応のフィードバックを受けた実験群の子どもは、母から子へという方向での、Xに関するコミュニケーションを確実に受けとっているので、また、これを機として母—子間でXに関してコミュニケーションの行なわれる可能性もあるので、統制群の子どもに較べ、この前提条件をいっそう十分に満たしていると思われる。そのことから次の仮説が考えられる。

〔仮説6〕 仮説3—aで述べた、子の側からの親近感情と Real Similarity との間の正の相関関係は、事後テストにおいては、実験群の子どもの方が、統制群の子どもの方が、統制群の子どもよりも顕著にみられるであろう。

子の側からの親近感情と Accuracy との関係についての仮説4は、主として子どもの認知体系に係わる仮説である。筆者らは親近感情の高低と Accuracy との間を媒介する変数として、親近感情の高低に伴なり、相手の行動に対する関心の程度の大小を考えている。筆者らの研究では親近感情をはるか尺度のものが相手に対する関心の有無を問う項目 (No. 53) を含んでおり、事前テストに関して言えば、この仮説は支持されている。しかし、Newcomb (1965) によれば、彼が大学寮において行なった親密化の過程の研究 (1961) では、Accuracy の水準は必ずしも Attraction に伴って変化していない。交際第3週目には、Accuracy の水準は、友人間の Attraction の程度に伴って増大するが、第15週目になると、この傾向は顕著でなくなっている。最も仲のよい友人に対しては、相手の態度と自己のそれとの一致を過大評価する傾向があり、それが Accuracy の水準を低めているからである。そして Accuracy の水準は、むしろ交際期間が長くなるにつれ増大

するのが一般的傾向となっている。交際期間が長くなるにつれ、相手のに対する態度についての情報量を増し、相手のに対する態度の自己による認知を是正していく機会が増すためと思われる。このように考えれば、Accuracyは、相手のXに対する態度についての情報の多寡および精度によって規定されるといえよう。

ところで、筆者らの研究の場合には、実験群の子どもは、母親のXに対する態度についてのフィードバックを受けているので、この点に関しての正しい情報を統制群の子どもより多く得ているといえよう。したがって「実験群の子どもの方が、統制群の子どもよりも、事後テストにおける Accuracy 増大の程度は高いであろう。」という関係が予想される。しかし、この点に関しては、筆者らの別の論文（古畑・鈴木，1971）に示されている通り、その予測は立証されているので、ここではこれ以上言及しない。

次に、仮説4で扱っている、子の側からの親近感情と Accuracy との相関関係については、親近感情の高低とフィードバックの操作（情報量）に対応関係がない（実験群の子どもは母への親近感情の高低にかかわらず一様にフィードバックを受けている。）ので、事後テストにおけるこの仮説に関しての均衡（相関）関係の変化の方向を予測することは困難である。他の指標と親近感情との関係についても、指標の類似度の変化に伴って、何らかの均衡関係の変化が予想されるが、その方向を予測することは難しい。

**方法：**被験者は、事前テストと同じく、都内私立女子中学2年生2学級98名およびその母親である。調査の一般的方法およびX（子どもの行動）に関する態度尺度ならびに母—子間の親近感情測定のための尺度は、第1報告において既に示した通りである。

1) 親近感情得点の算出。前記の仮説検証のため、まず母—子間の親近感情得点を、各母—子対ごとに、子の側からと母の側からと両側から算出した。この手続きは、第1報告で述べた事前テストにおける親近感情得点の算出方法と同じで、今回は、事後テストの結果に基づき、シグマ値法により重みづけを与えて10項目の合計点によって算出した。すなわち、6段階の各範疇に

第1表 各範疇別反応分布一覧

(子)								(母)							
項目	範疇							項目	範疇						
	1	2	3	4	5	6	ブランク		1	2	3	4	5	6	ブランク
51	0	1	4	5	29	50	(10)	51	0	0	4	21	37	29	(8)
52	0	1	4	10	29	46	(9)	52	0	1	16	25	30	18	(9)
53	1	1	5	16	21	36	(9)	53	0	5	8	39	29	10	(8)
54	1	2	0	6	19	61	(10)	54	0	0	3	9	33	45	(9)
55	6	42	19	12	4	6	(9)	55	9	21	35	17	7	2	(8)
56	0	10	26	34	12	6	(11)	56	7	15	37	30	2	0	(8)
57	7	23	34	15	7	3	(10)	57	14	30	41	5	1	0	(8)
58	7	19	22	24	10	6	(11)	58	6	10	25	45	4	1	(8)
59	7	14	30	20	14	5	(9)	59	11	23	32	16	6	3	(8)
60	15	27	29	13	3	2	(10)	60	12	23	38	15	3	0	(8)

おちる反応の分布は、第1表に示される通りであった。各範疇の中は等間隔とはみなしがたいので、第1報告で述べた仮定にたって、その反応分布を、平均0、標準偏差1となるような単位正規分布曲線下に区分し直し、各範疇の代表値は、Edwards (1957)の方法にしたがって、それぞれの中位点をもって示すこととし、それに対応する得点を算出した。第2表に示したのは、その値を10倍し、親の極が0となるように原点を移動した後の各項目別・各

第2表 シグマ値法に基づく範疇別換算点一覧表

(子)							(母)						
項目	範疇						項目	範疇					
	1	2	3	4	5	6		1	2	3	4	5	6
51		32	24	20	12	0	51			26	20	11	0
52		32	25	19	11	0	52		30	26	17	9	0
53	34	29	25	18	10	0	53		35	29	20	10	0
54	30	24	21	18	12	0	54			28	21	12	0
55	0	13	22	27	32	37	55	0	8	17	25	32	39
56		0	9	18	27	34	56	0	8	16	27	41	
57	0	9	18	26	32	39	57	0	10	20	32	40	
58	0	9	16	22	29	36	58	0	7	13	23	37	44
59	0	8	15	21	22	37	59	0	9	17	25	31	37
60	0	9	17	18	32	37	60	0	9	17	26	37	

第3表 前記重みづけ得点法による母—子別親近感情得点分布表

得点	0	21	41	61	81	101	121	141	161	181	201	221	241	261	281	合計
母子別	20	40	60	80	100	120	140	160	180	200	220	240	260	280	300	
子	0	2	5	13	8	10	10	18	8	4	3	2	1	0	1	85
母	3	3	5	4	4	5	11	14	17	12	6	3	1	1	0	89

第4表 事後テストにおける4指標に関する得点度数分布一覧表

4指標 得点	Assumed Similarity	Real Similarity	Accuracy	Satisfaction
0~10	7			2
11~20	36	4	7	6
21~30	13	11	12	9
31~40	15	19	19	15
41~50	1	11	11	8
51~60	2	5	8	7
61~70		4		4
71~80		4	3	2
81~90	1	1	1	
合 計	75	59	61	53

範疇別換算点である。このようにして重みづけを施した後に、各母—子対の親近感情得点を、子の側から、および母の側から算出した。その得点度数分布は第3表に示す通りである。

2) 態度の4指標における類似度の算出。他方、態度に関する4指標、Assumed Similarity（子—Iと子—IIとの比較）、Real Similarity（子—Iと母—Iとの比較）、Accuracy（母—Iと子—IIとの比較）および Satisfaction（母—Iと母—IIとの比較）を、兄弟に関する8項目を省いた42項目の差の合計の絶対値を測度として、各母—子対ごとに算出した。事後テストにおける4指標に関する得点度数分布一覧表は、第4表に示す通りである。

3) 親近感情と態度の類似度との相関係数の算出。仮説1を検証するため、子の側からと母の側からとの親近感情得点間の積率相関係数を算出し、また

第5表 母一子の親近感情と指標との相関係数

態度の指標		Assumed Similarity	Real Similarity	Accuracy	Satisfaction
母一子対における比較		子—I vs 子—II	子—I vs 母—I	子—II vs 母—I	母—I vs 母—II
親近感情	子 → 母	.30** (N=71)	a .22* (N=57)	.25* (N=55)	.18 (N=47)
	母 → 子	.00 (N=70)	b -.09 (N=60)	.02 (N=57)	.40** (N=52)

太線でかこまてゐるのは仮説2, 3 (a, b) 4, 5に対応する部分である。

\* 5%水準で有意

\*\* 1%水準で有意

仮説2から6までを検証するため、子の側から、ならびに母の側からの親近感情得点と、態度の4指標との積率相関係数を、実験、統制両群別に、および、両群の合計によって算出した。

結果：第5表、第6表および、第7表に示す通りである。

#### 1) 事後テストにおける均衡関係

まず、事前テストにおけると同様、実験群と統制群を合計した場合の結果をみるならば、母一子間の親近感情得点の相関係数は、 $r=.34$  (N=79) で、1%水準で正の相関関係がみとめられる。

次に、母一子間の親近感情得点と、態度の4指標との関係は、第5表に示す通りである。子の側からの親近感情と Assumed Similarity との間では、 $r=.30$ で1%水準で正の相関関係がみられ、また、Real Similarity, Accuracyとの関係では、それぞれ、 $r=.22$ および、 $r=.25$ で5%水準で正の相関関係がみとめられる。また、母の側からの親近感情と4指標との関係については、母の側からの親近感情と Satisfaction との間には、 $r=.40$ で1%水準で正の相関関係がみとめられる。以上の結果を要約すると、事後テストでは均衡理論から直接導かれた仮説1, 2, 3—a, 4が支持され、さらに、母の側の親近感情と Satisfaction に関する仮説5が支持された。

事前、事後における仮説検証の結果を比較できるように表示したのが第6



第6表 事前・事後テストにおける仮説検証結果（相関係数）の比較

事前 事後テスト	仮説 1	2	3	4	5
事前テスト	.47*** (N=88)	.40*** (N=73)	a .44*** (N=65) b .26 (N=65)	.32** (N=67)	.00 (N=58)
事後テスト	.34** (N=79)	.30** (N=71)	a .22* (N=57) b -.09 (N=60)	.25* (N=55)	.40** (N=52)

\* 5%水準で有意

\*\* 1% //

\*\*\* 0.1% //

表である。これによると、仮説1, 2, 3—a, および4は、事前、事後を通じて支持されており、仮説3—bは事前のみ、仮説5は事後テストにおいてのみ支持されている。

## 2) 事後テストにおける均衡関係の変化

筆者らが最初に意図したように、事前テストにおける実験、統制両群の等質性が保障されていたならば、事後テストにおいて、実験群と統制群との相関係数を比較することから、フィードバックによる均衡関係の変化を察知することができたであろう。しかしながら、実際には、事前テストにおける、実験群と統制群の $r$ の値は第7表に示すようであった。つまり、事前テストにおいては仮説5を除く、他のすべての関係において、統制群の $r$ の値の方が、実験群のそれより高かった。事前テストの段階で $r$ の値にこうしたひらきがみられたので、事前と事後の中間に実験群の子どもに与えられたフィードバックの効果は、実験、統制両群の $r$ の値の、事前、事後での比較を通して判断した方がよい点もある。

この観点から第7表を見ると、母一子間の親近感情の相関係数については、事前では統制群の $r$ の方が、事後では実験群の $r$ の方がそれぞれ高くなっている。母一子の親近感情を指標との関係についてみると、仮説5で扱う関係を除き、他はすべて、フィードバックを直接、間接受けた実験群の $r$ は事後

第7表 事前, 事後テストにおける相関係数の群別比較  
母—子間の親近感情の相関係数の比較

仮説	親近感情	群別	事前	事後
1	子 ⇄ 母	実験群	.38* (N=45)	.37* (N=42)
		統制群	.54*** (N=43)	.33* (N=37)

母—子の親近感情と態度の4指標との相関係数の比較

仮説	親近感情	態度の指標	群別	事前	事後
2	子→母	Assumed Similarity 子—I vs 子—II	実験群	.00 (N=39)	.12 (N=38)
			統制群	.63*** (N=34)	.54** (N=38)
3—a	子→母	Real Similarity 子—I vs 母—I	実験群	.25 (N=32)	.43* (N=28)
			統制群	.55 (N=33)	.03 (N=29)
4	子→母	Accuracy 子—II vs 母—I	実験群	.13 (N=33)	.27 (N=29)
			統制群	.46** (N=34)	.27 (N=26)
	子→母	Satisfaction 母—I vs 母—II	実験群	.00 (N=28)	.27 (N=26)
			統制群	.13 (N=30)	.10 (N=21)

仮説	親近感情	態度の指標	群別	事前	事後
	母→子	Assumed Similarity 子—I vs 子—II	実験群	.10 (N=39)	.30 (N=38)
			統制群	.49* (N=34)	-.07 (N=32)
3—b	母→子	Real Similarity 子—I vs 母—I	実験群	-.04 (N=32)	-.04 (N=31)
			統制群	.44* (N=33)	-.18 (N=29)
	母→子	Accuracy 子—II vs 母—I	実験群	-.14 (N=33)	.06 (N=30)
			統制群	.33* (N=34)	-.03 (N=27)
5	母→子	Satisfaction 母—I vs 母—II	実験群	.16 (N=28)	.34 (N=28)
			統制群	-.13 (N=30)	.30 (N=24)

\* 5%水準で有意

\*\* 1%水準で有意

\*\*\* 0.1%水準で有意

テストにおいて増大し、これのない統制群の  $r$  は事後テストにおいて減少するという傾向を示している。この傾向の明らかにみられるのは、仮説 3—a で扱う、子の側の親近感情と Real Similarity との関係であって、事前テストでは統制群のみに、事後テストでは実験群の  $r$  にのみ、それぞれ 1%と 5%水準で有意であり、事前、事後における相関関係の明瞭な変化を示している。それぞれ 1%と 5%水準で有意な正の相関関係がみとめられ、実験群における正の相関関係が事後テストで統制群より増加したのは明らかである。この事実からして、仮説 6 は支持されたと見えよう。

**考察：**まず、事前テストの 22 日後に行なわれた事後テストにおいても、事前テストにおけると同様、均衡理論から導かれた仮説 1, 2, 3—a, 4 が支持され、X を媒介とした母—子関係に対する均衡理論の適用可能性がいっそう明らかにされた。

次に、事前テストで支持された仮説 3—b は事後テストでは支持されず、事前テストでは支持されなかった仮説 5 が事後テストにおいて支持された。そこでその理由についての考察を試みよう。

第 6 表の相関係数の、事前、事後における比較から明らかなように、仮説 5 でとりあげる関係の場合をのぞき、他では相関係数が事後テストにおいて減少する傾向がみとめられた。第 7 表により、実験、統制両群別に  $r$  の値を吟味すると、統制群における  $r$  の値が事後テストにおいて減少しているために、実験、統制両群の合計に基づく  $r$  の値が事後テストにおいて低くなっているものと推定できよう。では何故統制群の  $r$  の値は、仮説 5 の場合（母親の体系に係わる）を除き、事後テストにおいて減少したのであろうか。その理由は必ずしも明らかではない。しかしながら、少なくとも次の事実は明らかである。すなわち、子どもの反応が関係する相関係数をみると、統制群の子どもの反応に關係する相関係数が事後テストにおいて減少する傾向に反して、実験群の子どもの反応に關係する相関係数は、事後テストにおいて上昇する傾向がみられ、この事後テストにおける実験群における正の相関関係の増加の傾向は仮説 1 で扱うような子の側の認知体系においてより、仮説 3—

aで扱うような母と子の対人的体系（正確に言えば、対人的体系の子どもの側）において、より顕著にみられる。これは、フィードバックという母から子へのコミュニケーションを通じて、子の側に、Xをめぐる母—子間の対人的体系が明瞭に意識されたものと解することができよう。しかし、本研究で筆者らがとったようなフィードバックの、母の側に及ぼす効果はより間接的なものである。それは家庭における子から母へのに関するコミュニケーションや、フィードバックを契機としての子どもの態度行動の変化に対する認知などによるものであろう。したがって、母の側のXに関する対人的体系は子ども側におけるほどには明瞭化されがたかったであろう。事後テストにおける実験群の $r$ が増大しなかったのはこのような事情にもよったのであろうか。さらに、何らかの理由から統制群の $r$ は減少すらしたので、両群を合計した場合にも、結局、仮説3—bは支持されなかったものと解しうるのではなかろうか。

第7表から明らかなように、仮説5が事後テストにおいて支持されたのは、実験群における相関係数の増大によるよりは、むしろ、統制群におけるその増大による。したがって、この場合は、実験群におけるフィードバックの効果とのみ考えられない。仮説5に関しては、他の仮説の場合のように、事後テストにおいて統制群の相関関係は減少していない。この仮説は、母の側からの親近感情と、母—Iと母—IIとの比較よりなる Satisfaction との関係に関するものであり、母の反応のみによって算出されている。仮説5が事前で検証されず、事後でのみ検証された理由は、現在までの資料の分析からは明らかでない。

事前と事後との相関関係の変動を問題とし、実験、統制両群における変化の量の差の検定を行なうには、事前と事後で相関関係を算出した母—子対に対応がなくてはならない。しかしながらここでは一応事前、事後それぞれにおいて、反応に欠損のない母—子対を選んだので、事前、事後で必ずしも完全な対応があるといえない。厳密に、相関関係の事前、事後における変化を論ずるためには、頻数はさらに減少するであろうが、事前、事後とも応答

の完全な対応のある母—子対を選択し、それに基づく再吟味もまた要請されるであろう。

## （その2）子どもの行動に対する母—子の反応・態度の変動性・安定性

**目的：**母—子にとって共通して関心のある、重要と認知される対象（子どもの典型的行動に関するもの）に対する、母—子の態度を、一定の枠組に基づく設問への反応を通してみた場合、その反応の一定時間経過後の変動性・安定性を、均衡理論との関係で、分析的に吟味検討することにある。

すでに第1報告その他でも略述したように、筆者らは基本的には、実験群と統制群とを設け、事前テストと事後テストにおける反応を、その中間に挿入した、一定の観点よりのフィードバックの操作の有・無により、比較検討することを試みたのであった。そして、その場合、主として Newcomb の均衡理論の構想を背景に、母—子—X（子どもの行動）をめぐる均衡状態の成立を、事前テスト（第1報告）・事後テスト（本報告のその1）のいずれにおいても見出すとともに、殊にフィードバックの相対的效果に関する知見（古畑・鈴木, 1971）を得たのであった。しかしながら、その間に特定化した操作は施さなかった統制群においてもなお、両テスト間には、ある程度の反応の変動も見出された。そこで、ここには、いわば他の3論文の補遺のかたちで、その反応の変動・安定度の程度を、筆者らの探ってきた基本的観点との関連で吟味しようとするものである。

**方法：**第1報告その他で既述の方法に基づく。その要旨を簡略に示すと次の通りである。

1) 勉強・兄弟・日常生活習慣・自己・友人・趣味の6領域から成る50項目の設問につき、子ども自身による。それらの領域での自己の行動についての評定（子—I）、自己の行動についての母親の評価の認知についての評定（子—II）、それに対応する項目についての、母親による、現実の子どもについての評定（母—I）、理想の子どもについての評定（母—II）を6段階の選択肢の中から最適の応答を選ぶ形式でおこなう。

2) 主たる被験者は、本報告その場合は、特定のフィードバックの行なわれなかった側の、都内私立女子中学2年生およびその母親各48名である。しかし、フィードバック群をも比較のため含む。

3) 事前テストを全被験者に施行し、その22日後に事後テストを施行し、その両テストで、子—I、子—II、母—I、母—IIの反応を基に、①Assumed Similarity (子—Iと子—IIとの比較より)、②Real Similarity (子—Iと母—Iとの比較より)、③Accuracy (子—IIと母—Iとの比較より)、④Satisfaction (母—Iと母—IIとの比較より)、の4指標をそれぞれ算出し、その間の反応の変動性・安定性を検討する。

なお、ここでは親近感情の側面を本報告・その2の場合には割愛したのは大要次の理由による。一般に、母—子の親近感情は多年にわたって漸次累積的に形成されてくるものであり、母—子—X間の体系の中では、最も安定していると考えられている。かつまた、古畑(1968, 1969)の青年の対人態度認知の機制に関する研究においても、P—O—Xの体系の中で、P—O関係は最も安定し変動しにくいと認知される傾向が明らかにされている。さらに、実験群に施行されたフィードバックは、現実ならびに理想の子どもをどのようにみるかに関するもの(母→Xの側面)に限定している。それらの故に、相対的に変動の可能性の大きい上記4指標に焦点をあてることにしたのである。

**仮説：**一般的にいつて、この種認知・態度に関する評定行動は、特定のフィードバックがなくても、母—子間では、日常多かれ少なかれ相互作用が行なわれているのであるから、その結果として変動してくる側面もあると考えられる。その変動は、特定の知的行動などに関してはかなり恒常性が高いのとは対比すれば、相対的には大きいであろう。しかし、その変動には、質問紙法に伴う制約の範囲内においてであるにせよ、被験者が真摯に応答するような配慮がとられていたとすれば——そして、事実その配慮は別論文において明らかにされているように、よくなされていたと解してよい——、次のような特徴が見出されるであろう。

1) 無作為の評定行動の際に生起するであろう偶然的変動よりは、有意に小さいであろう。

2) 特定のフィードバックの経験をもった母—子群に比すれば小さいであろう。それは、第1報告で既に明らかにされているように、事前テストでの母親による、現実ならびに理想の子どもの行動に対する評定は、50項目中29項目に有意差が認められたほど、その間には一般にずれが大きいので、そのようなフィードバックの経験をもった子どもの場合には、そうでない群の子どもに比すれば、相対的には不均衡の経験へと連なり、それが事後テストでの反応の変化へと導くことは、均衡理論の枠組に基づく限り、想定しうるところである。したがってそのような経験のなかった母—子群の方が、その変動は相対的には小さいと考えられよう。

3) (a)個人内認知体系にかかわる指標の変動の方が、個人間認知体系にかかわる指標の変動よりは大きいであろう。(b)前者の方が後者よりも一定の方向性をもった変動性を示すであろう。それは、個人内においての方が、(Assumed Similarity のような)、個人間のそれに比し、他との関係なしに変動が生起しやすく、またその変動は、たとえば、事前での Assumed Similarity の高低が、事後での Assumed Similarity の 高低と関連性が高いと推知しうるようなものでありがちだからである。

4) 最後に、子の方が母よりは変動しやすいであろう。一般に、ある特定の対象に対する認知・態度の変動可能性は、それに関する情報量の多寡にもよると考えられているが、またそれに伴って、子どもよりは母親の方が、安定度・変化抵抗が大きく、したがって子どもの方が変動しやすいと考えられるわけである。

**結果：1) 4種類の評定への反応の変動。**

事前テストと事後テストの間での平均変動量は第8表にまとめられている。これを1項目あたりにすると、4評定とも、6段階中0.66～0.76の範囲にある。その間には、そのいずれをとっても、有意差がない。事前テストと事後テストのいずれにおいても、ともに無作為に偶然的評定をしたとすれば、そ

第8表 4種類の評定への反応の変動

評定	N	Pre.—Post.	S. D.
子—I (Self)	42	28.81	14.42
子—II (Percept)	41	32.10	18.73
母—I (Actual)	40	28.35	10.57
母—II (Ideal)	43	29.00	15.23

の平均変動量は1.94, 標準偏差値は1.31となるので, それに比すれば, 一見かなりの変動を示したかのごとくにもみえるこれら4種の評定の変動量ははるかに少ないことが知られる。この結果は, 仮説1を立証するものである。

## 2) 4指標の変動

第9表 4指標の変動 (\* pは両側検定による)

指標	N	Pre.	Post.	Pre.—Post.	t	p*
Assumed Similarity (子—I vs. 子—II)	29	28.69	21.93	6.74	3.26	.01
Real Similarity (子—I vs. 母—I)	22	45.09	39.54	5.54	1.56	N. S.
Accuracy (子—II vs. 母—I)	22	42.95	39.86	3.09	1.01	N. S.
Satisfaction (母—I vs. 母—II)	19	46.21	38.63	7.58	3.31	.01

筆者らの用いた4指標の, 事前テストと事後テストとの間での変化は, 第9表に示した通り, いずれも, 差が減少するような方向でのものであった。これは, 別論文に示されているフィードバック群ほどではないにせよ, それと同様な傾向を示すものである。ただしその変化量が有意であったのは, 4指標中 Assumed Similarity と Satisfaction の両者のみであった。これは仮説3—aに対応する結果である。また, ここに表示されていないが, 仮説2で示した効果は, Real Similarity および Accuracy に関して, 殊に明確においだされている。これら2種の指標の変化は, フィードバック群では有意に顕著であったからである。



なお、ここで変動量算出の基盤となっている頻数がかなり少ないのは、事前事後のいずれにおいても、指標算出の基の2種ずつの評定のいずれをとっても、ブランクの皆無の、また二重チェック皆無の、完全に対応のみられる対のみをとっているからである。

### 3) 4指標の、事前テストと事後テストでの相関係数

この相関係数を表示したのが第10表である。この表からも知られる通り、

第10表 4指標の事前と事後での相関係数

指 標	N	r	p	Z'	$\frac{1}{N-3}$
Assumed Similarity	29	.583	.005	.667	.036
Real Similarity	22	.266	>.05	.272	.053
Accuracy	22	.433	.025	.463	.053
Satisfaction	19	.849	.005	1.254	.061

事前と事後との間で最高の相関がみられたのは Satisfaction であった。Assumed Similarity がこれに次ぎ、Accuracy は第3位であり、最低の相関係数を示したのは Real Similarity であった。なお、これら4つの相関係数間の差の有意性の検定を行なうと、Real Similarity と Accuracy および Accuracy と Assumed Similarity との間を除き、他の4つの間にはいずれも有意差が見出された。

この結果は、個人内認知体系にかかわる指標 (Assumed Similarity およびやや拡大解釈すれば Satisfaction をも含む) の方が、事前と事後との間での相関が高いというかたちで、一定の方向性をもった変動を、個人内認知体系にかかわる指標に比し示すであろうとの仮説3—bを裏付けるものである。また、子の方が母の方も変動しやすいであろうとの仮説4に対しては、子—Iと子—IIとから得られる Assumed Similarity の事前、事後での相関の方が、母—Iと母—IIとから得られる指標たる Satisfaction に比すれば、その相関が有意に低いという事実がひとつの傍証を与えるものといえよう。ただし、Assumed Similarity でみようとする側面と、Satisfaction でみようとする側面とは必ずしも同一な比較可能なものとはいえないので、

第11表 項目別評定の変動

子-I (Self)

(\*10%水準, \*\*5%水準)

項 目 番 号	Non-feedback Group			Feedback Group		
	Pre.	Post.	Pre.—Post.	Pre.	Post.	Pre.—Post.
1	3.85	3.65	0.20	3.94	3.59	0.35
2	3.70	3.49	0.21	3.74	3.63	0.11
3	2.71	2.33	0.38	2.43	2.37	0.06
4	3.37	3.49	-0.12	3.28	3.54	-0.26
5	4.07	4.09	-0.02	3.72	3.76	-0.04
6	4.38	4.31	0.07	4.34	4.09	0.25
7	3.38	3.33	0.05	3.52	3.39	0.13
8	2.35	2.35	0.00	2.66	2.85	-0.19
9	2.72	2.53	0.19	2.86	2.68	0.18
10	5.21	5.22	-0.01	5.09	4.90	0.19
11	5.36	4.97	0.39	5.41	5.02	0.39
12	4.28	3.89	0.39	4.00	3.59	0.41
13	3.30	3.67	-0.37	3.55	3.59	-0.04
14	4.32	4.64	-0.32	3.93	4.12	-0.19
15	4.74	4.28	0.46	4.27	3.98	0.29
16	4.56	4.56	0.00	4.66	4.44	0.22
17	2.96	2.86	0.10	2.86	2.66	0.20
18	3.64	3.40	0.24	3.34	3.15	0.19
19	3.00	3.02	-0.02	2.84	2.87	-0.03
20	4.00	3.42	0.58**	4.06	3.34	0.72**
21	3.64	3.35	0.29	3.67	3.15	0.52*
22	3.36	3.28	0.08	3.08	3.28	-0.20
23	3.49	3.79	-0.30	3.34	3.53	-0.19
24	3.80	3.70	0.10	3.73	3.70	0.03
25	3.26	3.30	-0.04	2.98	3.02	-0.04
26	3.91	4.14	-0.23	3.96	4.02	-0.06
27	4.28	4.86	-0.58*	3.76	4.30	-0.54**
28	4.52	4.58	-0.06	4.58	4.53	0.05
29	4.00	3.98	0.02	4.10	3.98	0.12
30	2.78	3.00	-0.22	3.04	2.96	0.08
31	3.16	2.79	0.37	3.48	3.00	0.48**
32	3.39	3.53	-0.14	3.22	3.21	0.01
33	2.61	2.95	-0.34	3.16	3.04	0.12
34	3.87	4.00	-0.13	3.88	4.23	-0.35
35	3.47	3.63	-0.16	3.54	3.47	0.07
36	2.38	2.09	0.29	2.30	2.30	0.00
37	5.27	5.30	-0.03	5.40	5.11	0.29
38	3.47	3.63	-0.16	3.48	3.57	-0.09
39	2.09	2.02	0.07	1.90	2.38	-0.48**
40	3.56	3.63	-0.07	3.80	3.83	-0.03
41	4.30	4.07	0.23	4.24	4.00	0.24
42	3.96	4.05	-0.09	3.72	3.72	0.00
43	2.78	2.70	0.08	2.54	2.40	0.14
44	2.91	2.53	0.38	2.62	2.35	0.27
45	2.59	2.72	-0.13	2.32	2.48	-0.16
46	1.87	1.95	-0.08	1.62	1.72	-0.10
47	2.61	2.68	-0.07	2.90	2.66	0.24
48	4.41	4.65	-0.24	4.92	4.70	0.22
49	3.50	3.52	-0.02	4.08	3.98	0.10
50	2.94	3.49	-0.55	3.28	3.55	-0.27

第12表 子—II, 母—I, 母—IIに関して有意差のみられた項目。

第12—1表 子—II (Percept.)

項 目	Pre.	Post.	Pre.—Post.
3	2.96	2.45	0.51*
20	3.98	3.55	0.43*
25	3.62	3.02	0.60**

第12—2表 母—I (Actual)

項 目	Pre.	Post.	Pre.—Post.
11	5.71	5.23	0.48**
37	5.21	4.74	0.47**

第12—3表 母—II (Ideal)

項 目	Pre.	Post.	Pre.—Post.
9	1.43	1.79	—0.36*
10	5.53	5.05	0.48*
11	5.70	5.28	0.42*
19	2.23	1.64	0.59**
37	5.23	4.80	0.43*
48	4.41	4.07	0.34*

その意味で、これはあくまでも傍証に過ぎないというべきであろう。

#### 4) 各項目別評定の変動

以上筆者らが検討してきた結果は、いずれも、各母—子対毎の単位においてであった。それに加えて、筆者らは、4種の評定の事前と事後での変動を、各項目別にもチェックした。付随的・補助的な資料として、子—Iに関してそれを示し、フィードバック群と対比したのが第11表である。また、子—II, 母—I, 母—IIに関して有意差の認められた項目をまとめたのが第12表である。これらの結果を通覧して、特に一貫した傾向は看取されない。

4種の評定の中、各50項目中有意差の認められたものの数は、子に関するものでは、フィードバックのなかったものの方がやや少ない。(第13表)

第13表 4種類の評定の有意差項目数一覧（各50項目中）（第13表）

評 定	Non-feedback	Feedback
子—I (Self)	2	5
子—II (Percept.)	3	6
母—I (Actual)	2	2
母—II (Ideal)	6	5

**考察：**筆者らは、特定のフィードバックの与えられなかった母—子群においても、子どもの行動に関する評定には事前テストと事後テストとの間には、かなりの変動が認められた点に着目し、それは、この種設問に対する評定行動の信頼性が必ずしも高いことを反映しているものとみるべきか、それにまさせて、その変動には一定の傾向が認められるかを分析的に吟味しようと試みたのであった。4種の評定のいずれにおいても、6段階評定で平均0.7前後の変動が認められたが、それは偶然の評定を行なった場合の事前、事後での変動量の約3分の1にあたり、それよりはるかに小さい。また、フィードバック群よりも小さい傾向があった。

また、個人内認知体系にかかわる変動の方が個人間認知体系にかかわるものよりも大きく、かつ前者の方が後者よりも、事前と事後での正の相関が高いというように、一定の方向性をもった変化を示す傾向の認められたことなどは、認知的均衡理論からひき出される仮説と合致する方向での変化であり、このようにみてくるならば、その変動には一定の傾向が認められるものといえてよいであろう。

さらに、一般に子の変化の方が母の変化よりはる大である傾向も見出されたが、この種認知・態度の母—子での安定度の差、変化抵抗などを反映する結果と解することはできよう。

以上みてきたものは、それ自体として独立して論じられる積極的意義を有するものではないが、しかし本報告のその1や、それに先行する第1報告や、さらにフィードバックの相対的效果に焦点をあてたいまひとつの成果などとの関連でみれば、それらの付随的・補助的資料の役割を担うものであるとも

いえよう。そしてこれらを集大成して総合的にみるならば、筆者らのとった、子どもの行動をめぐって構成される母—子—X間の体系、その間の認知的均衡状態成立への傾向性の存在を傍証する成果とみることができよう。

もとより、母—子関係一般、ないしは母—子の態度に関する研究にとって、筆者らの持った均衡理論の枠組でそのすべてが解明されうるものではない。しかしながら、ひとつの有用な視点であることを示す成果の累積は、今後さらに組織的に精深な研究推進への新たな手がかりが加えられたものとみることとはできよう。他方、方法論的な厳密さを欠く幾多の弱点をもまた卒直に容認しなければならない。その精緻化も今後の課題のひとつである。

#### 引用文献

- Edwards, A. L. 1957. *Techniques of attitude scale construction*. New York : Appleton-Century-Crofts.
- 古畑和孝 1968. 青年における対人態度認知の機制（その1）——均衡理論による吟味（予備報告）. 日本教育心理学会第10回総会発表論文集, 46—47頁.
- 古畑和孝・鈴木百合子 1969. 青年における対人態度認知の機制（第2報告）. 日本教育心理学会第11回総会発表論文集, 90—93頁.
- 古畑和孝・鈴木百合子・松野尚子・武岡千枝子・新井弘子 1969. 均衡理論の適用による母—子の態度に関する研究（第1報告）. ICU 教育研究, 14, 61—121頁.
- 古畑和孝・鈴木百合子 1971. 母親から子どもへのフィードバックの子どもの行動の変化に及ぼす効果, 教育心理学研究, 19, 3. (印刷中)
- Newcomb, T. M. 1961. *The acquaintance process*. New York : Holt, Rinehart & Winston.
- Newcomb, T. M. 1968. Interpersonal balance. In R. P. Abelson *et al.* (Eds.) *Theories of cognitive consistency*. Chicago : Rand McNally. Pp. 28—51.
- Newcomb, T. M., Turner, R. H. & Conrerser, P. E. 1965. *Social psychology : The study of human interaction*. New York : Holt, Rinehart & Winston.

## Mother-Child Attitudes toward the Child's Behavior and Their Interpersonal Attraction : An Application of Equilibrium Theory (II)

Kazutaka Furuhata and Yuriko Suzuki

The present paper concerns itself with, first, the examination of the relationships between some aspects of attitudinal similarity between the mother and the child and their interpersonal attraction at the stage of posttesting and, second, the examination of the variability of responses between the two tests made by the mother and the child.

As was stated in the first report, four indices concerning attitudinal similarity between the mother and the child were obtained from children's ratings on themselves (C-I) and their perception of the mother's ratings (C-II) on the one hand, and the mothers' ratings on their actual child (M-I) and an ideal child (M-II) on the other. In the present study, 98 female second graders in a private junior high school in Tokyo and their mothers served as subjects.

The pretest-posttest control group design was adopted and the subjects were randomly assigned either to the experimental condition (the feedback group) or to the control condition (non-feedback group). In the pretest, all the subjects rated the 50 items stated in the first report. Ten days after the pretest, feedback on each mother's responses regarding M-I and M-II were given to each child of the experimental group only. The posttest, consisting of the identical items with the pretest, was administered to all of the subjects, twelve days after the period of feedback.

The following hypotheses derived from equilibrium theory, particularly Newcomb's postulates on interpersonal balance, were substantiated in the posttest as well as in the pretest.

- 1) The child's attraction to her mother was positively related to the mother's attraction to her child.
- 2) "Assumed similarity" was positively related to the child's attraction to her mother.
- 3) "Real similarity" was positively related to the child's attraction to her mother, but contrary to the prediction, it was not significantly related to the mother's attraction to her child.
- 4) "Accuracy" was also positively related to the child's attraction to her mother.
- 5) Further, "satisfaction" was positively related to the mother's attraction to her child, which had not been supported in the pretest.

Next, the examination of responses of control group subjects between both tests revealed the following concerning the variability and the stability of the responses on the part of those subjects.

- 1) The variability of four indices were less than one third of the random variable errors.
- 2) The increase of "assumed similarity" and "satisfaction" of the control group subjects was less conspicuous than that of the experimental ones.
- 3) The variability of responses relating to intrapersonal cognitive structuring, such as "assumed similarity", was larger than that relating to the interpersonal system, such as "real similarity" and "accuracy".
- 4) The variability of responses by children was larger than that by mothers.

These findings were generally consistent with the predictions based on the equilibrium theory. Along with two other relevant articles by the authors, the results show more evidences of the applicability of the equilibrium theory to the investigation of parent-child relationships.